

上演された南信州の祭礼「坂部の冬祭り」＝浜松市中央区の静岡文化芸術大で



「坂部の冬祭り」を披露

浜松の神社祭礼関連催し 県内からも参加



三遠南信地域の民俗芸能について考えるイベントが18日、浜松市中央区の静岡文化芸術大で開かれた。同大で開かれている特別展「まぼろしの祝祭 天竜横山の

神遊び」の関連行事で、長野県南信地域の住民らによる祭礼の実演もあった。イベントでは、同大の宮嶋隆輔客員研究員が「横山の仮面群と中世遠江の芸能」と題して講演。特別展のテーマである横山八幡神社（天竜区）の祭礼で使われた11の仮面について「翁」、田遊び、「鬼神」の三つのタイプに分類できると紹介し、現存する近隣の祭礼との比較から面

がどのような祭礼で使われていたかを推測した。面を使った祭礼は、三遠南信地域に多く残る。この日は、長野県南信地域に伝わる「坂部の冬祭り」が大森山諏訪社氏子会によって披露された。南信州民俗芸能継承推進協議会アドバイザの桜井弘人さんが祭礼の由来や儀礼を解説した上で、「祭りは14人の集落で継承している。どう守っていくか、地域全体で考えな

いといけない」と話した。特別展は22日まで同大で開催。横山八幡神社で営まれてきた祭礼が1874（明治7）年に途絶えた理由について解説している。入場無料。（木谷孝洋）

1874年に突然廃絶 背景に神仏分離 浜松市天竜区の横山八幡神社で長年営まれ、1874年に突然途絶えた「幻の祭礼」。祭礼に用いられた面が同区の内山真龍資料館に残っているが、廃絶された事情は明らかでなかつた。静岡文化芸術大の二本松康宏教授らが解明に乗りだし、明治維新後の神仏分離政策が背景にあることが分かってきた。

調査の手掛かりとなったのは、天竜区出身の国学者内山真龍（1740～1821年）が1789年に記した「遠江国風土記」。面を使った祭礼はかつて、観音を前に営まれていたとの記載があった。

二本松教授や学生らが周辺を調査。横山八幡神社近くの寺院「宝珠院」に11面観音があった。寺の古い資料を引っ張り出してもらった「村民たちが協議して、明治7年に横山八幡神社から宝珠院に観音を移した」との記述が見つかった。

二本松教授は「明治維新後の神仏分離政策による廃仏毀釈の影響で祭礼がなくなかった」と分析。「自分たちの信じてきたものを何とか残したい」という思い

た。静岡文化芸術大の二本松康宏教授らが解明に乗りだし、明治維新後の神仏分離政策が背景にあることが分かってきた。

調査の手掛かりとなったのは、天竜区出身の国学者内山真龍（1740～1821年）が1789年に記した「遠江国風土記」。面を使った祭礼はかつて、観音を前に営まれていたとの記載があった。

二本松教授や学生らが周辺を調査。横山八幡神社近くの寺院「宝珠院」に11面観音があった。寺の古い資料を引っ張り出してもらった「村民たちが協議して、明治7年に横山八幡神社から宝珠院に観音を移した」との記述が見つかった。

二本松教授は「明治維新後の神仏分離政策による廃仏毀釈の影響で祭礼がなくなかった」と分析。「自分たちの信じてきたものを何とか残したい」という思い

で、住民たちがひそかに観音を守った」とみる。面を使った祭礼は、長野県南信地域の霜月神楽など、三遠南信地域に多く見られる。二本松教授は「天竜川や秋葉街道があり、三遠南信地域の文化や芸能の交流が多くあった」と語る。（柳昂介）

で、住民たちがひそかに観音を守った」とみる。面を使った祭礼は、長野県南信地域の霜月神楽など、三遠南信地域に多く見られる。二本松教授は「天竜川や秋葉街道があり、三遠南信地域の文化や芸能の交流が多くあった」と語る。（柳昂介）

で、住民たちがひそかに観音を守った」とみる。面を使った祭礼は、長野県南信地域の霜月神楽など、三遠南信地域に多く見られる。二本松教授は「天竜川や秋葉街道があり、三遠南信地域の文化や芸能の交流が多くあった」と語る。（柳昂介）